
三題噺 「光」 「氷山」 「ゆがんだ遊び」

柄卯鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三題噺 「光」 「氷山」 「ゆがんだ遊び」

【Nコード】

N6051Q

【作者名】

柄卯鳥

【あらすじ】

三題噺 「光」 「氷山」 「ゆがんだ遊び」

「この光の向こうには、何があるんだい？」

少年は、少女に向かって訊ねてみる。

「あなたの暗い未来が待っています」

少女は、少年の問いに静かに答える。

真っ暗で、真っ黒で、何も無い空間。周囲を見渡しても何も無い、目の前にある光の渦がなければ、目を閉じているのか開けているのかすら分からなくなるぐらい、不安に駆られてしまうぐらい、何も見えないそんな空間の中。

その中にあるのが、前述の光の渦と、いまだ背も低い一人の無邪気な少年と、背は高いけれど幼さを残した一人の静かな少女だった。「暗い未来？　こんなにも明るいのに？」

再び、少年が訊ねる。目を覚ました時、目の前に立っていてくれた、自分を静かに起こしてくれていた少女に、分からないことを親に訊く子供のように。

「明るいのは、あなたがココにいて、向こうへと帰るから……ただそれだけよ。光の向こうは、残酷な暗い未来だけ」

淡々と、だけど辛そうに、少女もまた答える。この先に何があるのか、またココがどこなのか、理解している口調で。

そのことに、少年も気付いたのだろう。そういえば、と三度言葉を紡ぐ。

「キミはココが、どこか知ってるの？」

「うん、知ってるよ。だけど、教えたならこの渦は消えちゃうからね。教えられない」

「それじゃ、キミが誰か教えてもらうことは出来る？」

「それもちょっと……でも、別にルール違反じゃないかな……？」

それは暗に、教えたくないという言葉。ルール違反ではないけれど、教えるのも大丈夫だけれど、教えてこないということは、そうい

うこと。ソレが理解できたから、少年もそれ以上の追求はしない。
代わりに、この目の前にある渦について、考えることにする。

……いや、そもそもどうして、自分の知らない、こんな真っ暗で
真っ黒な場所に、いつの間にやら立っていたのかを、思い出そうと
する。

「……………」

確か……そう、自分は学校にいた。まだ中学生で、おそらくは授
業中で、けれども自分は授業に参加していなくて……何か、どこか
暗い場所にいて――

「――ってことは……」

ここがその場所？

意識しないところで眩いてしまうほど、閃きにも似た感覚でそんなことを思うが、すぐさま違うと否定する。そもそも、自分がいた
暗い場所は、こんなに広くはなかったはず。目の前の、輝いている
けど眩しくない、不思議で不可解で大きな光の渦の明かりが届かな
いほど拾いこんなところみたいに、広くはなかった記憶がある。

だから違うと、否定した。

「何か、思い出したの？」

と、少年の眩きを聞いていたのだろう。今度は少女が問いかけて
くる。

「いや、何も。ただ僕は、どうも中学生みたい。そこまでは思い出
せるから、少なくとも、最低年齢は中学生、かな」

「そっか。私は高校生だから、私の方が年上ね」

なんて言って、少女は微笑んでくる。少女の右側、少年の左側……
そこに大きな口を広げて待つように在る、光の渦……その輝きに
照らされて映ったその笑みは、本当にキレイなもので……少年は思
わず、目を逸らしてしまう。

あまりにも、可愛すぎて。ある種の、美しさも感じられて。

「……あっ」

そうして視線を逸らして、下を見て、彼女の足が裸足なのを見て

……今更ながら、自分の衣服について確認する。

自分のポケットを漁りながら、自分の着ているものをチェック。

……とは言っても、極々ありふれた学ランだった。間違いなく中学生だと認識できるレベルのもの。ただちよつと、所々が薄汚れているのが見えていたが……まあ、自分が男である以上、友人と遊んだりするので当たり前かと、思いなおす。

それから流れるに、彼女の服装を改めて見ようと視線を上げ——ていくうちに、自分のズボンのポケットから、何やら紙の感触。何かの手掛かりになるかもしれないと、ソレを取り出し、四つに折りたたまれたソレを開いてみる。

『死ネ』

まず目に飛び込んできたのは、そんな文字だった。

「っ……！」

思わず、呼吸が出来なくなるぐらい、息を吞んでしまう。あまりの衝撃に、頭がクラクラしてしまう。

けれども、ソレも一瞬で……次の瞬間には、紙一面に書かれていたその文字の周りに書かれていた、ありきたりな誹謗中傷の文字を見て……そう言えば自分はイジメられてたんだな、なんて、ありきたりな出来事を想起させていた。

……思えば、自分が幸せだったことなんて、思い出せていなかった。ココがどこだか分からず、何かを思い出そうとした時に、友人の顔とか、楽しいクラスメイトとか、喜ばしい出来事とか、そういうのは全く、思い出せなかった。

代わりに思い出せたのは、暗い場所にいたことだけ。……誰かに無理矢理閉じ込められた、ということだけ。

だから、良い思い出なんて、思い出せなかった。

だってそもそも、そんな思い出がなかったのだから。

「ああ……そっか……そういうことか……」

気が付けば少年は、地面に片膝をついていた。

こうしてある程度思い出してみれば、イジメられていたという真実は全く衝撃的ではないけれど……それでも、思い出す前にしてみれば、ソレはかなりの衝撃だった。

ただ、それだけの話だった。

「何か、思い出したの？」

先程された、同じ質問。ソレが少女の口から、投げ掛けられる。

「いや、何も」

だからさつきと同じ、始まりの言葉を返す。

返しながら、静かに立ち上がる。

「ただ僕は、イジメられていたんだ。ありきたりなイジメで、使い古された嫌がらせをうけていた。……ただ、それだけなんだ」

答えながら、少女の言葉を思い出す。この光の渦についての言葉を、頭の中で再生する。

——暗い未来が待っています——

その言葉はきつと、そのまんまの意味。

ココから現実へと帰るという、そのまんまの意味。

……確かにソレは、暗い未来と言えるだろう。ココを抜けて現実に戻り、再び未来に向けて歩を進めるのなら……他人の憎悪をぶつけられ、他人の暴力に晒されるのならば……それは本当に、暗い未来。ココよりも暗くて、ココよりも黒い、そんな未来にその身を曝け出すということ。

……そう考えれば、ココにいた方が幾分も気が楽になる。辛い現実から逃げ出して、イヤがらせを受けることもなく、嫌悪の籠った言葉をぶつけられることもなく、ただただ生きていくことが出来る……それはなんて、幸せなことだ。気が楽になる、なんて言葉の比じゃない。

だから自分は、この場所に留まって……この光の渦に飛び込まずに、ココにずっと残って——

「それじゃあキミは、ココにずっと残るの？」

——そう、考えている少年の心を読んだかのように、相変わらず静かな少女の言葉が、耳に届いた。

「……………」

改めて、そう他人から言われると……それで良いのだろうか、少年は悩んでしまった。

そしてまた、その少年の心を読み取ったかのように、少女は言葉を紡いでいく。

「私も別に、ソレが悪いとは思わないよ。ううん。むしろ、逃げ出すことも大切だと思う。辛いんなら、逃げれば良いんだもん」

「……………」

「確かに、立ち向かうのも大切だよ？ でも、立ち向かってでも敵わないんなら、逃げれば良いじゃない。全力で」

「……………」

「キミが今まで生きてきた中で、どんな言葉を周りから言われたのか……私には分からない。……ううん、キミが今、何に悩んでいるのかも、どうして躊躇っているのかも、私には分からない。でも、話してもらっても、私はその重みを背負うことも出来ないから……だからさ、逃げれば良い、ってことしか、私は言えない」

逃げれば良い……そんな言葉をかけられたのは、初めてだった。自分に掛けられる言葉は全て、憎悪と嫌悪に彩られた、人を人とも思っていない、暴力にも似た言葉ばかりだったのに……彼女は逃げても良いと、そう言ってくれた。

それが、少年にとっては嬉しくて……思わず、涙が流れそうになってしまう。どうして自分は今まで逃げようとしなかったのか……どうして自分は今まで、あの憎悪と嫌悪の群れに立ち向かおうとしていたのか……そんなことを考えながら、少年は流れそうになる涙を堪える。袖口で拭って、意地でも頬へは流さないようにする。

嬉しさを見せないため……ではなく——

——まだ、泣くのは早いから。

……自分達の学校は、イジメばかり起きている。暴力的なものから、精神的なものまで。けれども世間に公開されるのは全て、自殺したり、自殺未遂にまで発展したもののばかりで……自分のように、辛うじて耐えられる、言葉や文字の暴力・僅かばかりのイヤがらせは、全く世間に公開されてくれない。氷山の一角、だなんて報道をしておいて、その氷山には足を踏み入れてはくれない。ヘリに乗って上から見るなんてことをして、それで踏み入れた気になって、それで終わってしまう。

だから少年のイジメは、続いていた。まるでゲームでもするかのうちに……どれほどまで耐えられるのか、そのギリギリを見極められる、ゆがんだ遊びでもされるかのように、ずっと。

「でも……僕が逃げるのは、ココじゃないよな」

ソレは、少女の言葉に対する、答え。

そして、自分の行いに対する、反省。

「向こう側でも、逃げる方法はいくらでもある……」

ソレは例えば、転校だったり、立ち向かうのを止めて誰かに訴えたり……色々だ。

「少なくとも、人生全てに逃げ出すほどじゃあ、ない」

結局ココがどこだか、少年には分からなかったけれど……それでも、ココに閉じこもったままよりかは、幾分もマシ。

だってココはきつと、全力で逃げ出した果てに、辿り着くべき場所だから。

だからまだ、全力で逃げ出していない自分が辿り着くには……早すぎた。

「……そっか……」

その、少年の言葉を聞いて……少女はそう呟いて、少しだけ、嬉しそうな表情を作る。

その表情を見た後、少年はその、自らの左側にある光の渦に向けて、一步を踏み出す。

「ありがとう、お姉さん」

二歩。

「お礼を言われるほどのことは、してませんよ」

三歩。

靴の爪先が、光の渦へと入る。

「でも、逃げても良いって、教えてくれたからさ」

四歩。

身体の半分が、飲み込まれる。

「ソレは、あなたにココに、逃げて欲しかったからよ」

「だったらソレは、向こうで逃げ道がなくなった果てにでも」

五歩。

最後の答えと共に踏み出したその一歩で……少年は、光の渦の向こう側へと消えた。

そうして、光の渦が消え……再び真っ暗で真っ黒になった世界で、目を開けているのか閉じているのか不安になる世界で、少女は一つため息を吐く。

「また、帰っちゃいましたか……」

『留めるつもりもなかっただろうに』

その声は、その空間全体に響き渡った。

「ん？ 相変わらず光の渦が無いときじゃないと、声を聞かせてくれないのね」

『そういうルールだからな』

男性とも女性とも、少年とも少女とも予測がつかない声が、続けてくる。

『というより、お前はこういうつもりなんだ？』

『どういうつもりって？』

『ココは、生と死の狭間の場所。つまりああして帰ったやつは現実

に帰り、こうして残ったやつ——』

「ずっと現実で意識不明だって言うんでしょ。何度も聞かされたから知ってるよ」

『ならば何故もう五回もああして見送るんだよ』

「だって……生き返るのは、怖いもの」

少女はそう、震えるように呟いた。

先程、少女が見逃した服装……それはまさに、入院衣。意識不明の重体者に着せる、看護婦などが着替えさせる際に使用する、そんな服。

「ずっとずっと……眠ったままで……つい最近、目が覚める目処が立っちゃって……もう死ぬんだとばかり想ってたのに……こんなところに飛ばされて……」

一時は、絶望的だった。意識がありながらも眠ったような状態。それが五年間、続いていた。

けれども今は、意識が切り離され……こうして、この真っ黒で真っ暗な、生と死の狭間に意識がある。

いつでも、目が覚められるように。

「だから私は、逃げてるの。現実から。生きてる現実から。ずっと動いている心臓を無視して、ずっとずっと……」

それはある種、ゆがんだ感情。歪な気持ち。ゆがんだ、遊び方。彼女の状況よりも辛い人が来ない限りは現実に帰らないという、ゆがんだ遊び。

『……はあ……』

響き渡る声が、ため息を吐く。

『まあ、お前の好きにすれば良い』

そう言い残して、響き渡る声が、静かになる。

「……………」

そうして再び、その空間には……少女が一人にいるのみになった。それが彼女にとっての、幸せであるように。

五年間も意識がありながら身体を動かせなかった彼女にとって……

：この程度、どうってこともない、むしろ不自由の無い、幸せだったから。

（後書き）

五分ほどオーバーしてなんとか書き上げた…

…が、相変わらず推古できない…

うゝん…もう少し短いのを書けば推古も出来るんだろうけど…
気が付けば長くなって…

この辺りの制御をもう少しどうにか出来るようにならないと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6051q/>

三題噺 「光」「氷山」「ゆがんだ遊び」

2011年2月2日23時40分発行